

富津市町田遺跡

—国道465号線（町田地区）埋蔵文化財調査報告書—

平成21年3月

千葉県県土整備部
財団法人 千葉県教育振興財団

ふ っ つ し ま ち だ
富 津 市 町 田 遺 跡

- 国道465号線（町田地区）埋蔵文化財調査報告書 -



序 文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その結果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告書第615集として、千葉県県土整備部の国道465号線町田地区道路建設事業に伴って実施した富津市町田遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、古墳時代終末期の二重周溝を持つ大型方墳の周溝部分や集落跡などが発見されており、この地域の歴史を知る上で多くの貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、本書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理までご苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成21年3月

財団法人 千葉県教育振興財団
理事長 福 島 義 弘

凡 例

- 1 本書は、千葉県県土整備部による国道465号線（町田地区）道路建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に所収した遺跡は、千葉県富津市岩坂字町田312-2ほかに所在する町田遺跡（遺跡コード226-009）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県県土整備部君津幹線道路建設事務所（現千葉県君津地域整備センター）の委託を受け、財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者並びに実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆・編集は主席研究員兼整理課長 高田 博が担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉県県土整備部、富津市教育委員会から多くの御指導、御協力を得た。記して感謝申し上げたい。
- 7 本書で使用した地形図は以下のとおりである。
 - 第1図 国土地理院発行 1/25,000 地形図「上総湊」「鬼沼山」
 - 第2図 東日本高速道路株式会社作成 1/2,500 地形図に加筆し使用した。
- 8 周辺航空写真は、京業測量株式会社による平成20年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北であり、測量値は日本測地系による。

本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査の概要	1
1	調査の経緯と経過	1
2	遺跡の位置と環境	1
3	調査の方法と概要	3
第2章	検出された遺構と遺物	8
第1節	弥生時代	8
1	竪穴住居跡	8
2	溝状遺構	9
3	遺物出土地点	11
第2節	古墳時代	11
1	町田古墳	11
2	竪穴住居跡	13
3	溝状遺構	16
4	土坑	19
5	遺物出土地点	20
第3節	奈良・平安時代	23
1	遺物出土地点	23
第4節	中近世	26
1	道路状遺構	26
第3章	まとめ	27

挿 図 目 次

第1図	周辺の遺跡	2	第13図	1 1 4	16
第2図	調査区域と周辺の地形	4	第14図	0 0 1	16
第3図	北調査区全体図	5	第15図	0 0 3	17
第4図	南調査区全体図	6	第16図	0 0 5・0 0 8・0 0 9・0 1 2	18
第5図	1 1 3	8	第17図	0 0 6	19
第6図	1 1 3 出土遺物	9	第18図	0 0 7	20
第7図	1 0 9・1 1 0	10	第19図	1 0 1・1 0 2・1 0 3	21
第8図	1 0 9 出土遺物	10	第20図	1 0 2 出土遺物	22
第9図	1 1 2 出土遺物	11	第21図	1 0 3 出土遺物	22
第10図	0 1 0	12	第22図	1 0 4 出土遺物	23
第11図	1 0 6・1 0 7	13	第23図	1 0 1 出土遺物	24
第12図	1 0 6・1 0 7 出土遺物	14	第24図	グリッド・トレンチ出土遺物	25

図 版 目 次

図版1	遺跡周辺航空写真	図版5	トレンチ調査状況・遺構(1)
図版2	遺跡遠景(1)	図版6	遺構(2)
図版3	遺跡遠景(2)	図版7	遺構(3)
図版4	調査前状況・トレンチ調査状況	図版8	出土遺物

表 目 次

第1表	町田遺跡遺構一覧	29
-----	----------	----

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過

千葉県は、国道465号線の整備を富津地区の町田地区に計画した。実施にあたり、千葉県県土整備部から区域内の「埋蔵文化財の所在の有無とその取り扱いについて」の照会文書が千葉県教育委員会宛に提出された。区域内には町田遺跡、町田古墳が所在しており、その取り扱いについて千葉県教育委員会との間で度重なる協議が行われた。その結果、現状保存が困難な区域については、やむを得ず記録保存の措置を講ずることで協議が整い、財団法人千葉県教育振興財団が発掘調査を実施することとなった。なお、この計画はその後、東関東自動車道千葉富津線（館山自動車道）として、高規格化された自動車専用道路に継承され、調査も路線幅を拡張して発掘調査することとなった。¹⁾

町田遺跡の発掘調査は、平成10年12月1日から平成11年2月25日まで実施し、調査対象面積20,880㎡のうち上層確認調査1,395㎡、上層本調査4,688㎡を実施した。

担当職員 上席研究員 吉野健一

整理作業は、平成20年9月1日から12月28日まで実施し、図面作成から遺物実測、写真図版作成、原稿執筆までを実施し、それらを報告書として刊行した。

担当職員 主席研究員兼整理課長 高田 博

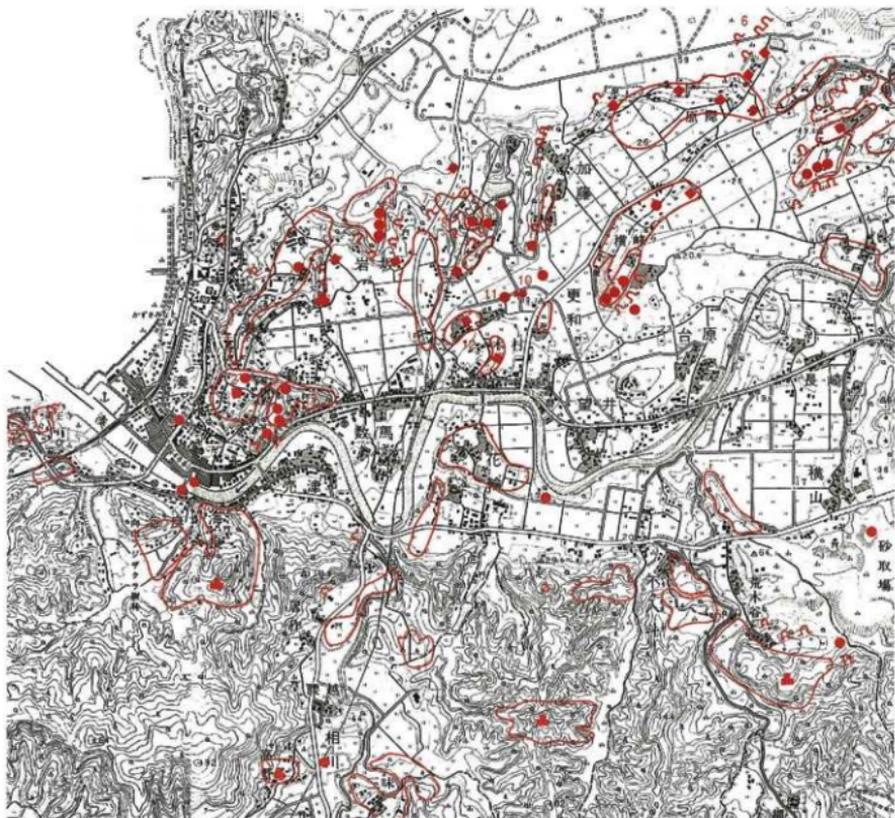
2 遺跡の位置と環境

富津市は千葉県の東京湾側の中央部のやや南に位置し、市の北部は東京湾に注ぐ小糸川が、その南部は湊川がそれぞれ東京湾に流入し、河川の流域は肥沃な沖積地を形成し、それぞれ独自の文化圏を形成している。湊川は房総丘陵の北端の標高315mの高宕山とその西側の標高264mの愛宕山の間の山合いの豊岡地区に源を発し、北に向かい徐々に川幅を広げ、国道465号線と交差する関尻・東大和田付近よりは西に方向を変えながら広大な沖積平野を形成していく。

町田遺跡は河口から2.5kmの下流域右岸の河岸段丘上に位置している。周辺の沖積低地は湊川が蛇行を繰り返して複雑な微高地を形成し、また、周辺の台地には支谷が樹枝状に入り込んでいる。近年の土地区画整理によって水田は大きな区画になったが、近世以降の村落は沖積低地のなかでも微高地上に点在し、居住地を選定している。

町田遺跡は遺跡分布図²⁾では台地の縁辺と湊川近くを省いた東西500m、南北150mの範囲で、町田古墳を中心とした河岸段丘上を捉えていたが、今回の調査範囲は南北に585mで、幅は33m程を測る調査区であり、現標高は北端で17.5m、南端で8.6mを測り比高差は9m近くになる。湊川に近い地点にも弥生時代以降の居住地が確認され、町田遺跡の範囲はより大きく捉えられた。

町田遺跡の位置する湊川中流から下流域の右岸の沖積地から台地上にかけては、南向きの緩斜面であることから数多くの遺跡が所在する。縄文時代には西1kmに後期加曾貝B期の富士見台貝塚³⁾と中期の岩井遺跡⁴⁾が隣接している。弥生時代は前述の富士見台遺跡のほか北方400mの台地上に岩坂大台遺跡⁵⁾など後期の遺跡が隣接する。古墳時代は側壁や天井部に帆船や網の繚刺が施された県指定の大溝墳穴群⁶⁾が



- | | | | | |
|----------|-----------|-----------|-----------|----------|
| 1. 町田遺跡 | 2. 富士見台遺跡 | 3. 岩井遺跡 | 4. 岩坂大台遺跡 | 5. 大満横穴群 |
| 6. 西山横穴群 | 7. 水神A横穴群 | 8. 水神B横穴群 | 9. 水神C横穴群 | |
| 10. 塚田古墳 | 11. 上北原古墳 | 12. 下北原遺跡 | | |

第1図 周辺の遺跡

北西すぐの丘陵斜面に群集し、北東1.5kmには西山横穴群⁷⁾の30基が調査され、さらに路線延長上には水神B号横穴群¹⁾が調査され、澗川右岸だけでも総数300有余を数える横穴群が存在する⁸⁾。一方、高塚古墳は横穴墓と比べ数は少ないものの、終末期の方墳である町田古墳⁹⁾、町田古墳の東方500mに位置する形象埴輪を出土した塚田古墳¹⁰⁾、その東方150mには前方後円墳の上北原古墳¹¹⁾などが沖積地の微高地に占地され、これらは当地の古墳時代の社会構成を考えるうえで貴重な資料となろう。

3 調査の方法と概要

調査にあたっては、20m×20mの方眼網を設定し、これを大グリッドとした。大グリッドの名称は、南北方向を北から1、2、3…、東西方向は西からA、B、C…とし、この数字とアルファベットを組み合わせ大グリッド名とした。なお、館山遺調査時に新グリッドを追加してある。(第2図)。大グリッドは2m×2mの小グリッドに100分割し、北から00～90、西から00～09とした。グリッド名は、大グリッドと小グリッドを組み合わせ、例えばB22-25と呼称した。

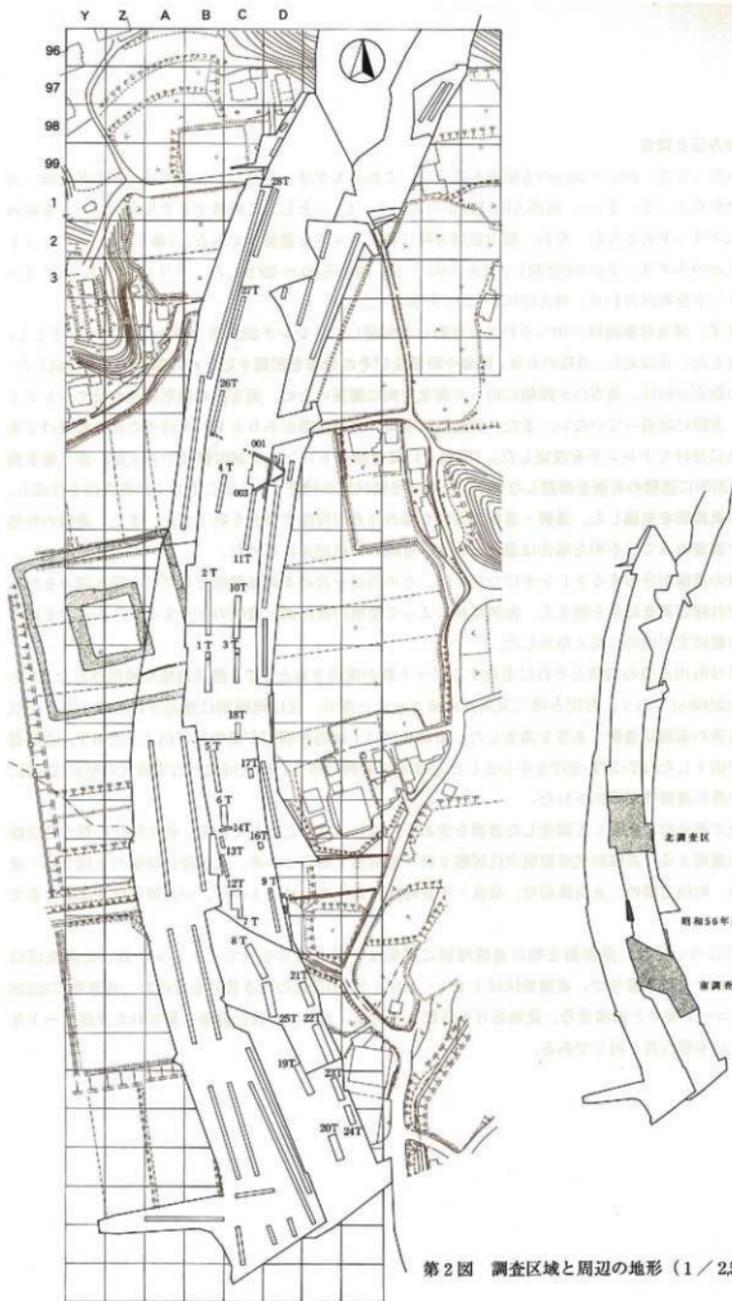
調査はまず、調査対象面積の10%を目処(実際は7%弱)にトレンチ28か所(呼称は1T～28Tとし、調査順に付した)を設定し、遺構の有無、種類や時期及びその分布を把握するための確認調査を実施した。トレンチの設定方向は、調査区が路線に沿って南北方向に細長いため、調査区の線形に合わせてトレンチを設定し、方眼には沿っていない。また、調査区の中央に生活道路がありトレンチはその部分を避けて東西それぞれに分けてトレンチを設定した。(図版4)確認調査トレンチは掘削機械で表土層、客土層を掘り下げ、平面的に遺構の有無を確認しながら、土層の堆積状態を精査し、必要に応じ土層断面図を作成し、それらの写真撮影を実施した。遺構・遺物が希薄な場合はその段階で調査を終了した。また、遺構の性格がトレンチ調査のみでは不明な場合は適宜拡張し、遺構の性格把握に努めた。

中世以前の遺構が分布するトレンチについては、その周辺を含め本調査範囲として引き続き調査を行った。それぞれ確認調査結果を踏まえ、掘削機械によって遺構の検出面、遺物の出土するレベルまでを掘り下げ、その範囲を平面的に捉え精査した。

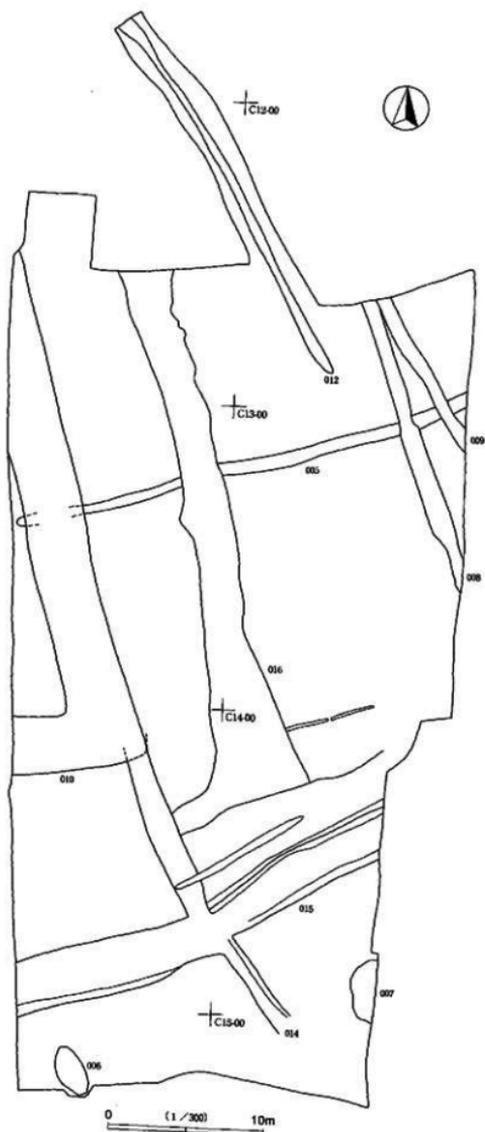
北調査区は町田古墳の周溝とそれに重複するピット群が検出された1Tと溝状遺構が検出された3Tを中心とした2,088㎡であり、町田古墳二重周溝南東コーナー部分、ほぼ同時期に想定される溝4条、土坑2基、中近世の道路状遺構3条等を調査した。南調査区は土師器や羽口が集中して出土した8T、土師器やスラグが出土した21T・22T・25Tを中心とした2,600㎡の範囲であり、弥生時代と古墳時代の竪穴住居跡、弥生時代の溝状遺構等が検出された。

確認調査で部分的に拡張して調査した遺構を含めその総数は次のとおりである。弥生時代の竪穴住居跡1軒・溝状遺構2条、古墳時代前期竪穴住居跡2軒・遺物出土地点3か所、古墳時代後期の土坑2基・溝状遺構6条、町田古墳の二重周溝部分、奈良・平安時代の遺物出土地点1か所、中近世道路状遺構3条である。

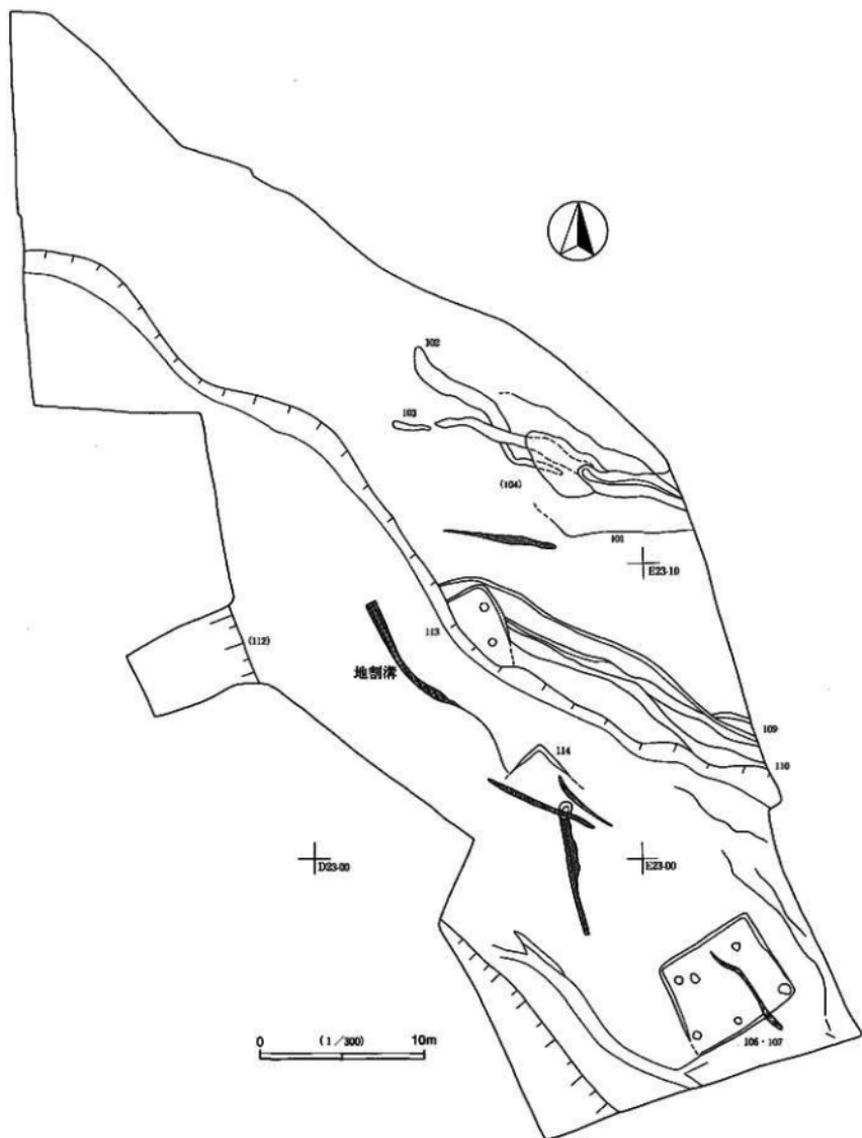
遺構番号については、発掘調査順に遺構種別に関係なく通し番号を付し、トレンチ及び北調査区は001・002と続き番号で、南調査区は101・102と100番代の続き番号を付した。各遺物には226-009の遺跡コード番号と遺構番号、遺物番号を注記してある。また、各種記録類に記された遺跡コード及び遺構番号は本報告書と同じである。



第2図 調査区域と周辺の地形 (1 / 2,500)



第3图 北調査区全体图



第4图 南调查区全体图

- 注1 平成18年3月 『東関東自動車道（水更津・富津線）埋蔵文化財調査報告8』（財）千葉県教育振興財団
- 2 昭和62年3月 『千葉県埋蔵文化財分布地図（3）』
- 平成12年6月 『千葉県埋蔵文化財分布地図（4）（改訂版）』（財）千葉県文化財センター
- 3 昭和62年3月 『富士見台遺跡』（財）君津都市文化財センター
- 4 平成4年4月 『岩井遺跡』（財）君津都市文化財センター
- 5 昭和58年3月 『岩坂大台遺跡』（財）千葉県文化財センター
- 6 昭和48年3月 『大溝横穴群調査報告書』同発掘調査団
- 7 昭和54年3月 『西山横穴群調査報告書』同発掘調査団
- 8 平成15年3月 『千葉県所在洞穴遺跡・横穴墓群詳細分布調査報告』（財）千葉県文化財センター
- 9 平成3年3月 『町田遺跡群』君津市教育委員会

第2章 検出した遺構と遺物

第1節 弥生時代

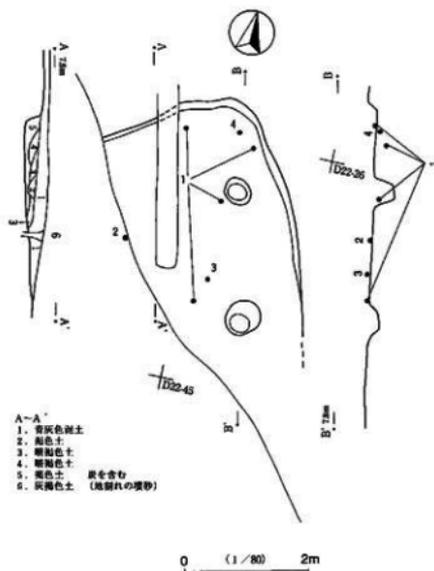
弥生時代の遺構は南調査区で検出された竪穴住居跡1軒と住居跡によって切られている溝状遺構2条である。その他に西端側の泥炭層に落ち込む手前の部分に弥生土器が出土している。南調査区を北西～南東方向に段差が走り、竪穴住居跡にかかっており、この段差の西半分は床面、壁面が検出されない。また、竪穴住居跡、溝状遺構2条ともに多数の地震の填砂が確認され、遺構が構築された後に地震等によって出来た痕跡である。

1 竪穴住居跡

113 (第5・6図 図版7・8)

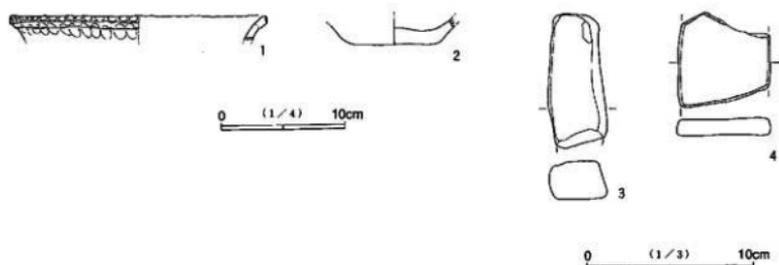
南調査区の中央部の標高7.25mの地点に所在する。南東から北西に走る15cm～20cmの段差がありその下方には存在せず、多くの部分が失われている。

東側は弥生時代の2条の溝状遺構109・110を切って構築される。平面形は隅丸方形の一隅を中心に遺存しており、その範囲は南北方向に4m、東西方向に2.5mである。床面には2か所にピットが穿たれている。



第5図 113

出土遺物は床面から甕口縁、砥石 2 点などが出土した。1 は広口の甕口縁部で口縁の 45% が遺存している。復元口径 21.0m、を測る。口唇部に押圧痕が巡らされ、その下方に指頭痕が残る。2 は甕の底部である。3・4 は砂岩の砥石である。



第 6 図 113 出土遺物

2 溝状遺構

109 (第 7・8 図 図版 7・8)

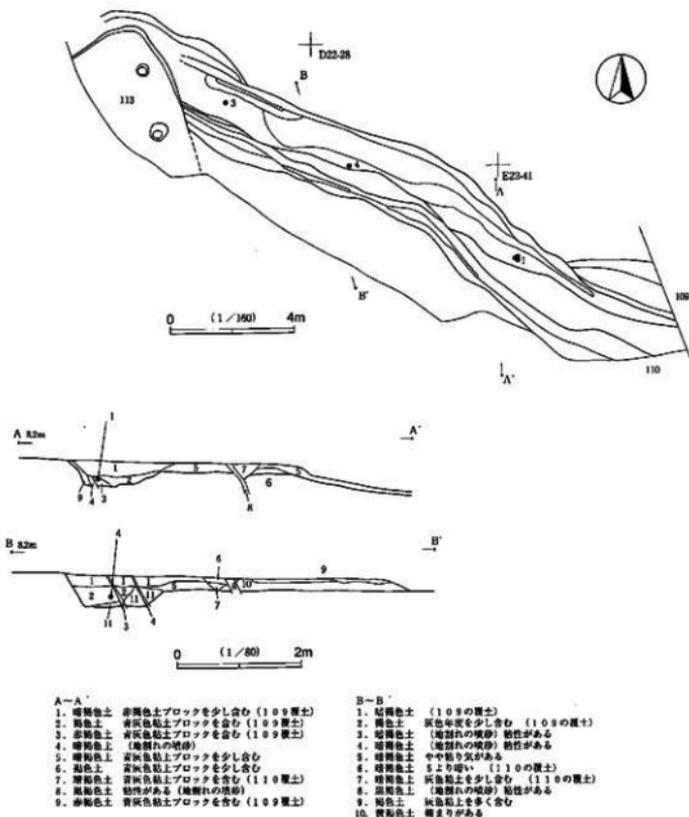
南調査区中央の東側より北西に延びていく溝状遺構で、東側は事業地外に続いていく。確認された長さは 18m を測る。南側に上端を接するほどに 110 溝状遺構が併走し、本溝のごく一部が切られている。さらに、その南側には段差が同じ方向に走っている。底部の標高は東端で 8.05m、北西端で 7.7m を測り、比高差は 35cm を測る。溝の幅は 1.0m ~ 1.5m、深さは東側で約 50cm、北西側で 35cm ほどを測る。

出土遺物は甕、壺胴部破片が出土した。1 は小形の甕で頸部から上部を欠損している。胴部から底部にかけてはほぼ遺存しており、胴部は球形を呈し、中央に最大径があり 14.0cm、底径 5.6cm を測る。肩部に刻み目が巡らされそれより口縁部に向かい広がっていく形状であろう。2 ~ 4 は壺の胴部上半の破片である。山形や平行になる沈線で区画された中に細縄文や羽状の細縄文が施される。

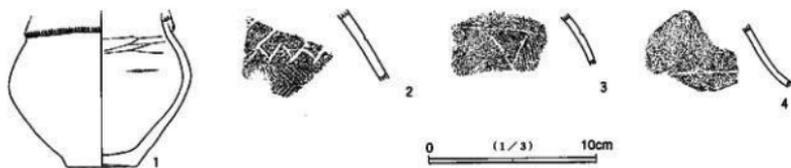
110 (第 7 図 図版 7)

南調査区中央の東側より北西に延びていく溝状遺構で、109 と同様に東側は事業地外に続いていく。確認された長さは 18m を測る。南側 1m ~ 2m には段差が同じ方向に走っており、東端はこの段差により、欠損している。底部の標高は東端で 8.0m、北西端で 7.7m を測り、比高差は 30cm を測る。溝の幅は 20cm ~ 70cm、深さは東側で約 30cm、中央で 20cm、北西側で 40cm ほどを測る。

出土遺物は甕、壺胴部の細破片が出土した。



第7図 109・110



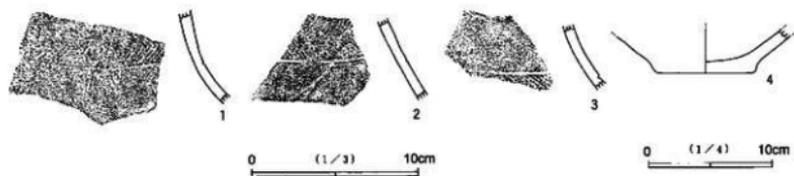
第8図 109出土遺物

3 遺物出土地点

112 (第4・9図)

弥生時代の土器が出土した地点である。113住居跡より10m西の泥炭層に落ち込む直前の低地面に位置する。何らかの遺構が存在したと思われるが詳細は不明である。

壺の口縁3点、甕底部が検出された。1～3は壺の胴上半の破片である。平行沈線で区画された内側に細縄文や羽状の細縄文が施される。4は甕の底部である。



第9図 112出土遺物

第2節 古墳時代

北調査区では町田古墳外周溝(010)部分、周溝に削平される直線的で箱形に掘られた小規模な溝が数状、土坑2基が検出された。また、北調査区の北方70mに町田古墳と重複する溝と同形な箱形の溝(001・003)を検出した。この2条の溝に関しては遺物の出土がなく形状に大きな変化がないことからトレンチを拡張する範囲内で調査を終了している。南調査区では前期末の竪穴住居跡2軒、同時期の遺物を出土する溝状の遺物出土地点を2か所検出した。

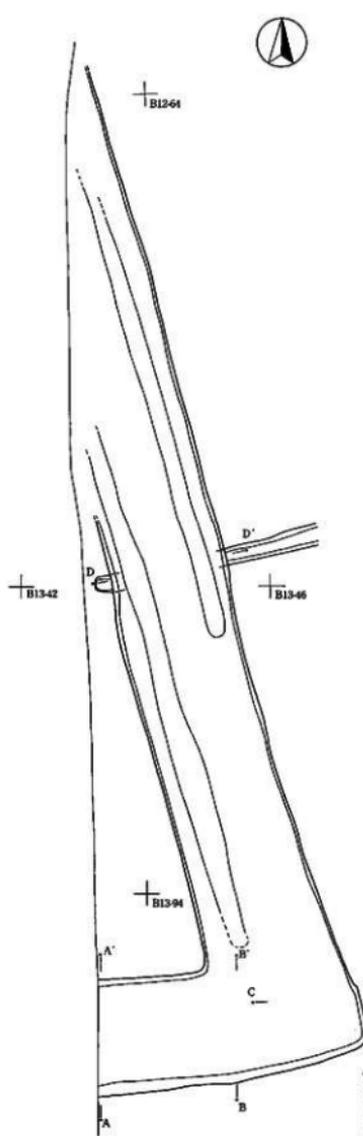
1 町田古墳

010 (第10図 図版6)

北調査区の北西部に検出された町田古墳の二重周溝部分である。事業境界線上の現表土面標高は17.1mを測るほぼ平坦地であり、表土下20cm～50cmと浅くに周溝の落ち込みが検出された。南東部のコーナ一部分の外側と内側の落ち込みが捉えられ、外側はそれより北北西に35m、西に8m直線上に続き、内側では北北西に17m、西に35mの範囲が検出された。

東側周溝の中央付近で005溝状遺構と直交するよう重複し、本古墳の方が新しい。また、周溝の検出面では東側周溝の外側に中近世の014道路状遺構が平行して走り、多数のピットが存在し、また、南側周溝にも近世の溝が築かれ遺存状態は悪くなっている。

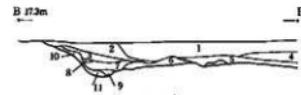
周溝の幅は3.7m～4.1mを測り、東側周溝の外側はやや内側に湾曲している。東側の二重周溝の方位を測るとN15°-Wを測り、磁北よりやや西に振れて掘り下げられている。深さは20cm～40cmと浅く、壁面は一様に垂直に掘り下げられている。底部は平坦に穿たれ、東側の周溝は壁際に平行して2条の楕状の凹みが認められ、中央部よりも堅緻になる。それぞれの幅は60cm～70cm、深さは5cmを測る。標高は南部ほど徐々に低くなり、北から南に行くほど標高が低くなる地形に沿って構築されている。



- D-D'
1. 灰褐色土 粘質性があり暗く硬まりがある。
 2. 黒色土 赤褐色土の粒子を含む硬く締まる。
 3. 暗灰色土 粘質性があり灰白色の粒子を含む。堅く締まる。
 4. 黒褐色土 土より赤褐色塊が暗く硬く硬物が少ない。
 5. 黒褐色土 灰褐色の粒子を含む。
 6. 暗灰色土 粘質性があり硬く硬物も少ない。
 7. 暗褐色土 粘質性がある。表面は粘着層が暗く硬く硬物が見られる。
 8. 黒色土 粘質性があり。暗く硬く硬物も少ない。
 9. 暗褐色土 粘質性がある。粘着層の暗褐色の硬物。
 10. 灰褐色土 粘質性があり。灰白色の粒子を多く含む。(0.85の硬土)



- C-C'
1. 灰褐色土 灰色のブロックを含む
 2. 褐色土 中や赤からい
 3. 暗褐色土 赤褐色の斑点が散在する。
 4. 黒褐色土 灰褐色のブロックを含む。
 5. 灰褐色土 灰褐色土を少し含む
 6. 灰褐色土 灰褐色のブロックを含む
 7. 灰褐色土 堅く締まる。粘りが少ない。中近位の遊離硬化面
 8. 黒褐色土 表面に赤褐色の斑点が散在する。
 9. 暗褐色土
 10. 黒褐色土 かなり赤褐色である。
 11. 黒褐色土 灰褐色土を少し含む。
 12. 黒褐色土 灰褐色土を少し含む。
 13. 暗褐色土 灰褐色土を少し含む
 14. 暗褐色土 黒褐色土を少し含む
 15. 暗褐色土 黒褐色土を少し含む
 16. 黒色土 ビットの硬土



- B-B'
1. 灰褐色土 赤褐色の斑点が上部に散在する
 2. 灰褐色土
 3. 灰褐色土 灰褐色の粒子を含む
 4. 灰褐色土 灰褐色土をセミアク状に少し含む
 5. 暗褐色土 灰褐色土をセミアク状に多く含む
 6. 暗褐色土 黒色土の粒子を含む
 7. 灰褐色土 黒色土。灰褐色土の粒子を多く含む
 8. 黒褐色土 灰褐色土。赤褐色土を少し含む
 9. 暗褐色土 黒色土をセミアク状に入入する
 10. 暗褐色土 黒色土を少し含む
 11. 灰褐色土 黒色土を少し含む



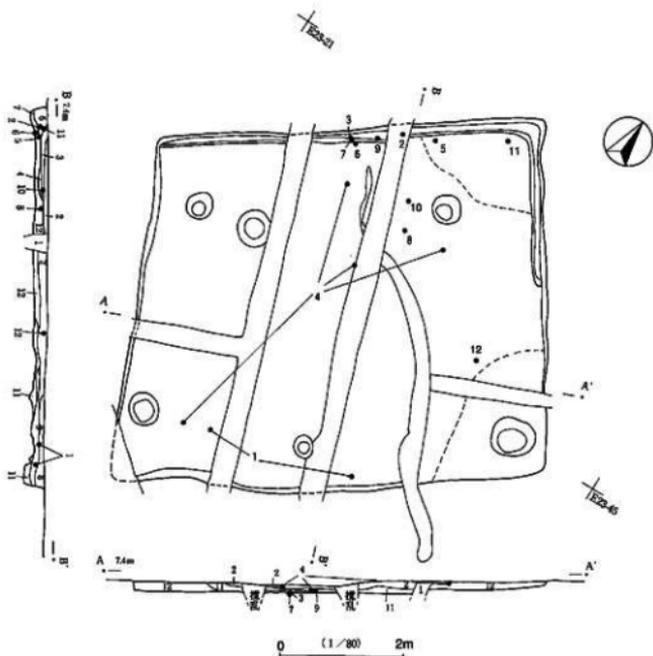
- A-A'
1. 灰褐色土 近現代の耕作土
 2. 黒色土 灰褐色の粒子を含む (近現代の層)
 3. 黒色土 灰褐色のブロックを少し含む (近現代の層)
 4. 灰褐色土 灰褐色のブロックを含む (近現代の層)
 5. 灰褐色土 灰褐色のブロックをやや多く含む (近現代の層)
 6. 黒色土 中や赤褐色を帯びる
 7. 暗褐色土 灰褐色の粒子を少し含む
 8. 暗褐色土 灰褐色のブロックを多く含む
 9. 灰褐色土 黒色の粒子を少し含む
 10. 暗褐色土
 11. 暗褐色土

第10図 010

2 竪穴住居跡

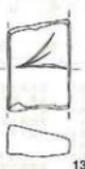
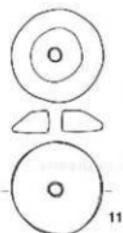
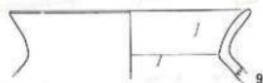
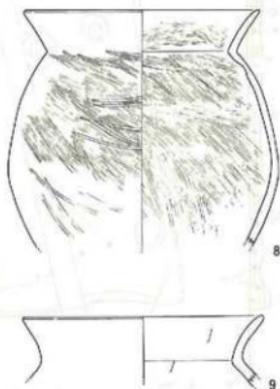
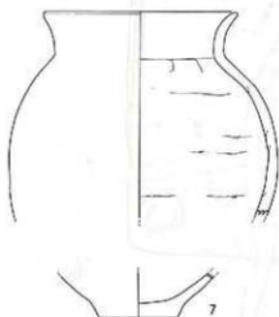
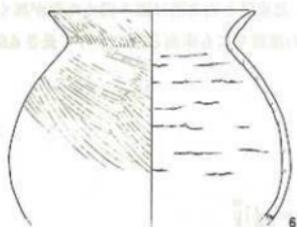
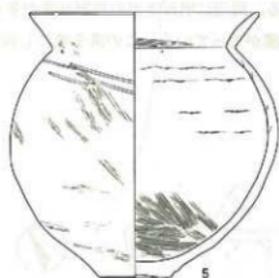
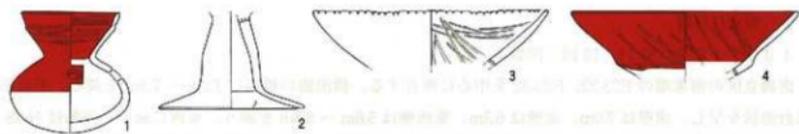
106・107 (第11・12図 図版7・8)

南調査区の南東端のE23-22、E23-32を中心として所在する。検出面の標高は7.2m～7.3mを測る。平面形は台形状を呈し、南壁は7.0m、北壁は6.3m、東西壁は5.6m～5.8mを測り、東西に長い。短軸はN-35°-Wを指す。壁高は10cm～15cmほどで浅く北壁と東壁の一部に壁周溝が巡る。床面は中央部は堅固につくられるが、北東隅と南東隅は踏み固めた面が無く、軟質である。周辺に填砂流出の地割れ溝が多く存在し、本住居跡の東寄りにも床面と壁にかけて長さ6.6mの地割れ溝が走っている。この溝を境にし西側は10cm



- | | |
|----------|--------------------|
| 1. 暗褐色土 | 柔らかく脆り突がある(地割れの填砂) |
| 2. 褐色土 | 木炭、燻土粒子を多く含む |
| 3. 赤褐色土 | 燻土を多く含む |
| 4. 褐色土 | 炭化粒子を少し含む |
| 5. 暗褐色土 | 木炭ブロックを少し含む |
| 6. 暗褐色土 | 炭化粒子を含む |
| 7. 暗褐色土 | 炭化粒子を含む |
| 8. 暗褐色土 | 炭化粒子を多く含む |
| 9. 暗褐色土 | 炭化粒子を多く含む |
| 10. 暗褐色土 | 炭化粒子を多く含む |
| 11. 暗褐色土 | 炭化粒子を多く含む |
| 12. 暗褐色土 | 炭化粒子を多く含む |

第11図 106・107



0 (1/4) 10cm

0 (1/3) 10cm

第12图 106·107出土遗物

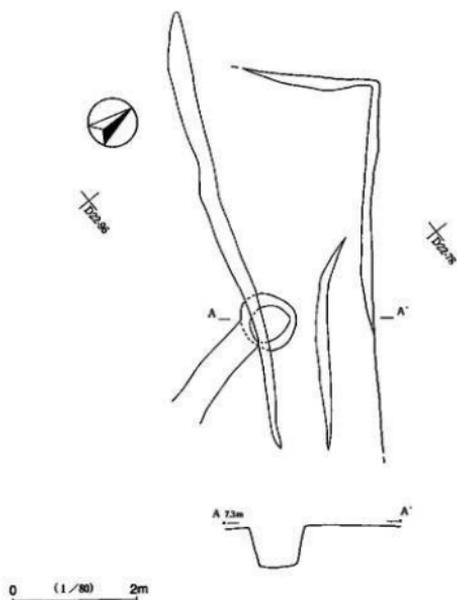
ほど深く床面が存在し、当初は2軒の堅穴住居跡として捉えたが、地震によって床面の一部に段差が生じた1軒の住居跡と判断した。ピットは6か所に穿たれやや不規則ではあるが、四隅寄りに位置することから柱穴になると考えられる。床面に炉跡は検出されなかった。

出土遺物は北から北東隅と西側にまともって土師器高杯、甕、紡錘車等が検出された。1は土師器の甕である。底部から胴部は80%遺存しているが、頸部から口縁にかけては10%のみ遺存する。やや扁平になる胴部の肩部に1孔を有し、口縁は頸部よりくの字形に開き一度内側に小さく折り返された後にさらに開いていく。胴部最大径14.6cm、口径7.9cm、器高9.8cmを測る。2は高杯脚部である。杯部を欠き、脚部の30%が遺存する。裾部は低く大きく開き、脚の中央は膨らみを持ち、接合部は細く締まる。3・4は高杯杯部である。3は40%が遺存する。やや内湾しながら開き、口唇部に刻み目が巡らされる。口径19.0cmを測る。4は杯部の10%が遺存するのみである。下半で一度内側に絞られ、外反し、直線状に立ち上がって行く。口径18.4cmを測る。器面の荒れが著しいが、内外面ともに赤彩される。5～10は甕であり、口縁部は直線状あるいは外反しながら開く単口縁の甕である。5は底部は全周し口縁部は30%が遺存する。胴部はほぼ球形を呈し、底部に向かいすぼまり、上げ底気味の底部になる。口縁は直線状に開く。口径18.5cm、器高21.5cmを測る。6は胴部は60%、口縁部は40%遺存する。胴部下位に最大径がある。口縁部は外反気味に開く。外面口縁部、胴部に刷毛目が残される。口径16.6cmを測る。7は口縁部～底部の60%が遺存する。やや胴長で口縁部は緩やかに外反し、全体に厚みがある。口径15.6cm、推定高25.0cmを測る。8は口縁部は30%、胴部40%が遺存する。やや胴長で口縁は直線状に開く。口径19.0cmを測る。9は口縁部はほぼ全周する。口径19.4cmを測る。器壁はやや厚い。11は滑石製の紡錘車である。最大径5cm、厚さ1.3cmを測り扁平で鋭利なつくりである。12・13は砂岩製の砥石で立方体形と短冊形を呈する。

114 (第13図)

南調査区の南寄りの中央部のD22-76、D22-87を中心に所在する。検出面の標高は7.25mを測る。地山が西に下がっていき、西側では住居跡の多くの部分が確認されなかった。北隅を中心に南東方向に6m、南西方向に2.3mが直線状に遺存し、平面形は方形が推定される。北東壁の方位はN-50°Eを指す。床面は踏み固めは弱く、径1.0m、深さ70cmのピットが1か所のみ検出された。性格は不明である。床面と周辺には埴砂流出の地割れ溝が多く存在し、本住居跡の北東壁に平行して長さ7.4mと3.5mの2条、それに交差する長さ7mの1条が走る。

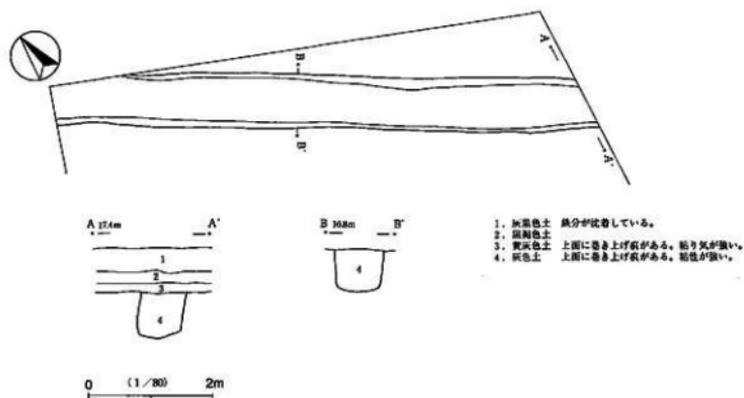
出土遺物は覆土中に土師器単口縁の甕破片が検出されている。



第13図 114

3 溝状遺構

001 (第14図 図版5)



第14図 001

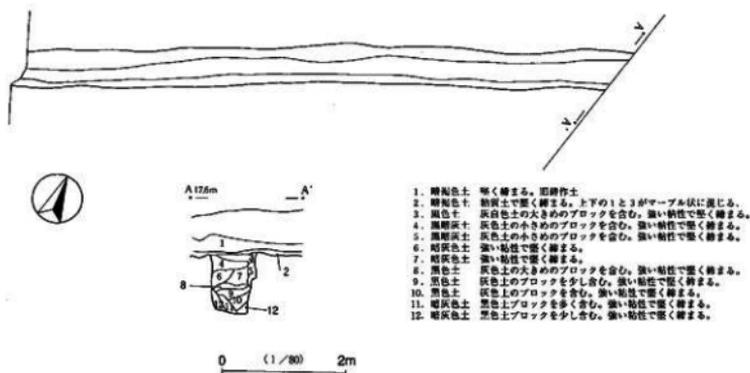
11Tの拡張区と26Tの南端に確認された溝である。平成14年度東側調査区で調査され、それより北西方向に直線上に繋がった部分の調査区である。東端から9m弱の調査である。溝の推定長は45mを測り、両端は平成14年度調査区内で途切れているため、全長は50mに満たない。検出面での幅は80cm～90cm、深さは60cm～70cmとほぼ一定であり、壁面はほぼ真っ直ぐに立ち上がる。底面断面は緩やかに湾曲し、標高は15.8mで高低差はない。

出土遺物はなし。

003 (第15図)

11Tの北寄りに確認された溝である。平成14年度東側調査区で調査され、それより南西に直線上に延びていく。調査された長さは9.5mほどで、平成14年度の西側調査区で検出されていないため、001と同様本事業地境界付近で途切れると思われる。検出面での幅は50cm～60cm、深さは80cm～100cmで、壁面はほぼ真っ直ぐに立ち上がる。底面の標高は東端で15.7m、西に行くほど高くなり16mほどを測る。

出土遺物はなし。

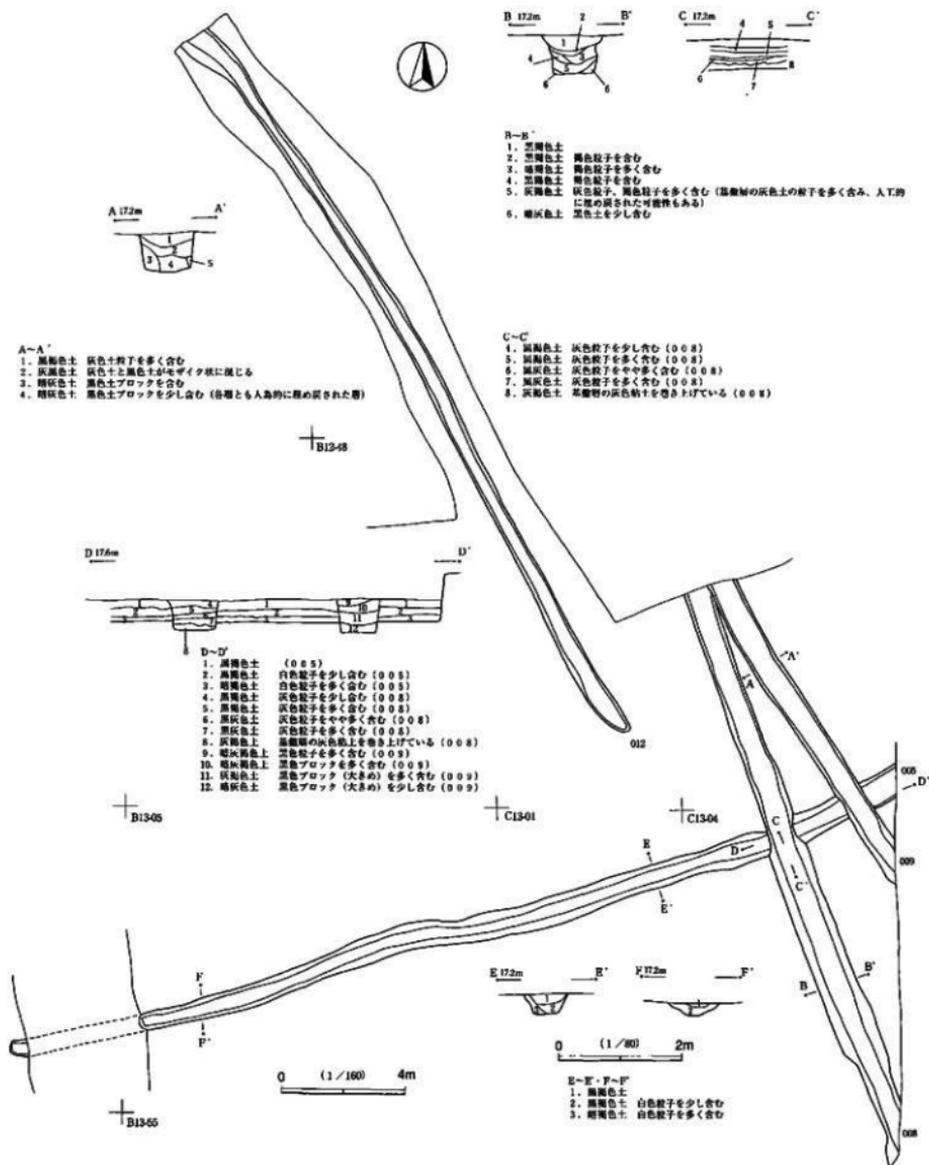


第15図 003

005 (第16図 図版5)

北調査区はやや北部を東西に走る溝状遺構である。全長31mを測り、東側は事業地外に続いていき、西側は平成14年度西側調査区を26m走り、更に西方に続いていく。東側で008・009溝状遺構と重複しており本溝状遺構が古い。また、西側では010町田古墳の外周溝と重複しており、町田古墳の方が新しい。従って、本溝状遺構は古墳時代後期に構築された町田古墳以前で古墳構築前の遺構と考えられる。検出面での幅は60cm～100cm、深さは15cm～40cmを測り、壁面はほぼ真っ直ぐに立ち上がる。底面断面は平坦であり、底面の標高は東側で16.4m、西側で16.1mを測り西ほど低くなっていく。

出土遺物はなし。



第16図 005・008・009・012

008 (第16図 図版6)

北調査区の北東部端を南北方向に走る溝状遺構である。005を掘削し、更に、北端で009に僅かながら切られている。検出された長さは19.5mを測り、直線的に築かれる。幅は南側で1.4m、北端で90cmを測る。深さは南側で1m、北で20cmと浅くなり、壁高も低くなっていく。底面の標高は南端で16.4m、北端で16.7mを測り北側ほど高い。出土遺物はなし。

009 (第16図 図版6)

北調査区の北東部端を南北方向に走る溝状遺構である。西側に008と方向を10°ほど違え近接し、僅かながら重複し、本溝の方が新しい。検出された長さは11.4mを測り、ほぼ直線的に築かれる。幅は80cm～90cmを測る。深さは南側で50cm、北で80cmとなる。底面の標高は南端で16.4m、北端で16.2mを測り北側がやや低い。

出土遺物はなし。

012 (第16図)

北調査区の北端中央から北北西方向に走る溝状遺構である。東6mに所在する009と同方向に築かれる。検出された長さは26mを測り、北端側で西に緩やかに曲がっていく。幅は40cm～60cm、深さは15cmと浅い。底面の標高は16.8m～16.9mでほぼ水平である。

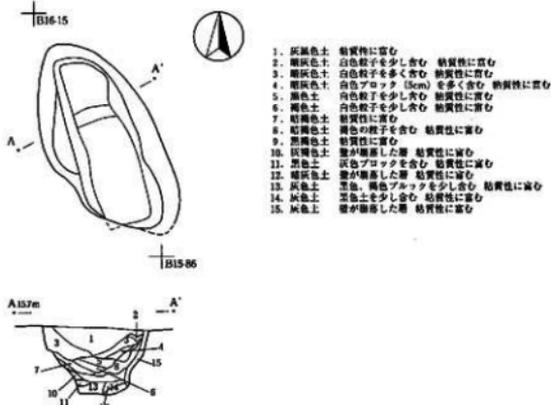
出土遺物はなし。

4 土坑

006 (第17図 図版7)

北調査区の南西端のB15-15、B15-25に所在する。平面形は長軸3.5m、短軸1.8mほどの長楕円形を呈する。深さは南側で1.3m、北側で0.9mを測る。底面は長方形に近い平面形となり、長さは2.8mで北側の80cmの範囲が40cmほど高い。

出土遺物はなし。

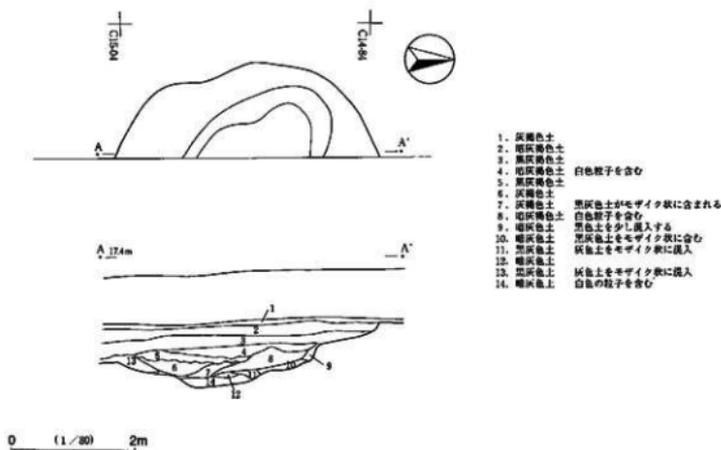


第17図 006

007 (第18図)

北本調査区の南東部壁際のC14-84、C14-85に所在する。全体のおおよそ2/3は事業地外に所在し、未調査である。断面部分を見ると上端は4.3m、下端は2.3mを測り緩やかに掘り込まれる。

出土遺物はなし。



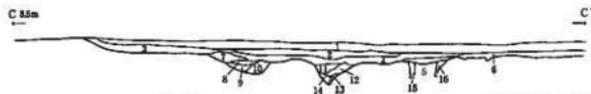
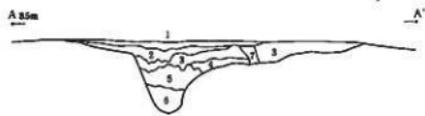
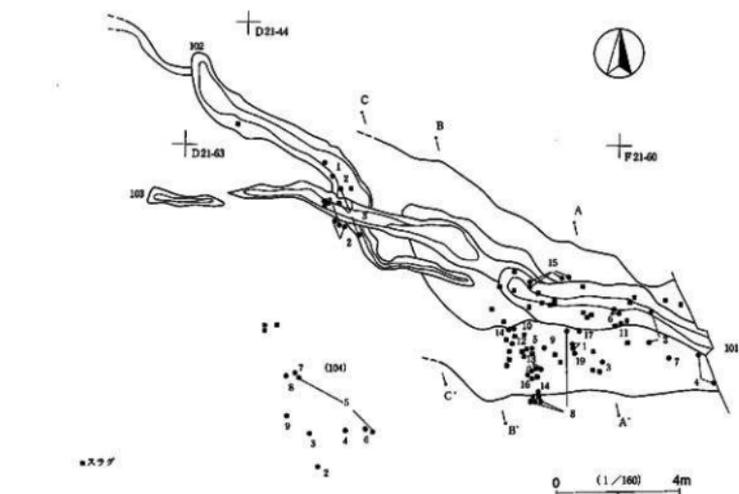
第18図 007

5 遺物出土地点

102 (第19・20図 図版6・8)

南調査区の北東寄りのD21-53、D21-65を中心とした東南-西北方向に延びる溝状に続く落ち込みから、古墳時代の土師器が出土したことから102として調査した。不規則に蛇行し、南側は東西方向に屈折して幅も細くなる。東端は奈良・平安時代の土器を出土する101に上方を削られている。中央部付近よりやや南では同時代の土師器を出土する103に削平されている。落ち込みの全長は11.5mを測り、幅は1.4mから東端では30cmを測る。底部の標高は東端で7.5m、中央部で7.6m、西端では7.8mほどで東ほどやや低くなっていく。遺構としての性格は捉えられず遺物出土の落ち込みとして報告する。

出土遺物は小形壺1点、高杯の2点が検出された。1は口縁部を欠損した小形壺で胴部の40%が遺存する。最大径はほぼ中央部で14.2cmを測り、やや潰れた球形を呈し、底部は上げ底となり径3.4cmを測る。2・3は高杯である。2は口縁部はほぼ全周し、底部は80%遺存する。杯部は溝状に緩やかに立ち上がり、脚部は細長く伸び下端で裾部に広がっていく。その境目に3個の透かし穴を有する。口径15.4cm、高さ11.6cm、裾部径9.6cmを測る。3は脚部のみの遺存で全周する。ラッパ状に開いていき、裾部で屈折しさらに開く。厚い作りである。

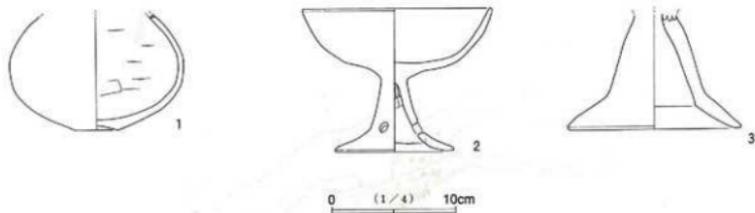


- 101 図
A-A
1. 灰褐色土 褐色土ブロックを少し含む 粘性のある砂質土
 2. 灰褐色土 粘性のある砂質土
 3. 灰褐色土 粘性のある砂質土
 4. 暗灰褐色土 粘性のある砂質土
 5. 暗灰褐色土 粘性のある砂質土
 6. 暗灰褐色土 粘性のある砂質土
 7. 灰褐色土 粘性のある砂質土

- B-B
1. 灰褐色土 白色の砂子、白色の砂子を含む。中粒土・五黄の礫土
 2. 暗灰褐色土 白色の砂子、白色の砂子を含む。
 3. 暗灰褐色土 白色の砂子、白色の砂子を含む。
 4. 暗灰褐色土 白色の砂子、白色の砂子を含む。
 5. 暗灰褐色土 白色の砂子、白色の砂子を含む。
 6. 暗灰褐色土 白色の砂子、白色の砂子を含む。
 7. 暗灰褐色土 白色の砂子、白色の砂子を含む。
 8. 暗灰褐色土 10の礫山層に連続している。
 9. 暗灰褐色土 褐色土、黄褐色土の砂子を含む
 10. 暗灰褐色土 褐色土、黄褐色土の砂子を含む。砂をやや含む
 11. 暗灰褐色土 砂、粘土を含む。黄褐色を帯びる。(103の覆土)
 12. 暗灰褐色土 褐色土、黄褐色土をマール状に含む。(103の覆土)
 13. 暗灰褐色土 17の礫山層に連続している。(103の覆土)
 14. 暗灰褐色土 粘性が強い(崩壊れの境目)
 15. 暗灰褐色土 粘性が弱い(崩壊れの境目)

- C-C
1. 灰褐色土 白色砂子、白色砂子を含む。(中粒土、五黄の礫土)
 2. 暗灰褐色土 白色砂子、白色砂子を含む(101の覆土)
 3. 暗灰褐色土 (101の覆土)
 4. 暗灰褐色土 黄褐色土ブロックを多く含む(101の覆土)
 5. 暗灰褐色土 礫層による急な急上げを受けている
 6. 暗灰褐色土 やや暗灰褐色を帯びる
 7. 暗褐色土 褐色土のブロックを少し含む(103の覆土)
 8. 暗灰褐色土 (103の覆土)
 9. 暗灰褐色土 褐色土をほとんど含まない(103の覆土)
 10. 暗灰褐色土 褐色土を少し含む(103の覆土)
 11. 暗灰褐色土 黄褐色の砂子を含む(102の覆土)
 12. 暗灰褐色土 褐色土ブロックを多く含む(102の覆土)
 13. 暗灰褐色土 褐色土ブロックを含まない(102の覆土)
 14. 暗灰褐色土 さらさら感がある(103の覆土)
 15. 暗灰褐色土 (崩壊れの境目)
 16. 暗灰褐色土 (崩壊れの境目)

第19図 101・102・103

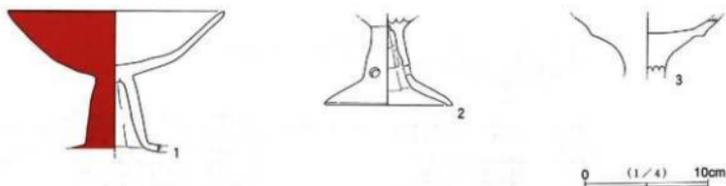


第20図 102出土遺物

103 (第19・21図 図版6・8)

南調査区の北東寄りのD21-65、D21-77を中心とした東西方向に延びる溝状の落ち込みから、古墳時代の土師器が出土したことから103として調査した。東側は奈良・平安時代の101に削平され、途切れている。中央部付近では102を削平している。全長は13mを測り、幅は1.1m～30cmほどを測り、西側で狭くなり、1が所部分的に途切れている。底部の標高は東端で7.5m、西端でも7.6mほどを測り高低差はあまりない。遺構としての性格は捉えられず遺物出土の落ち込みとして報告する。

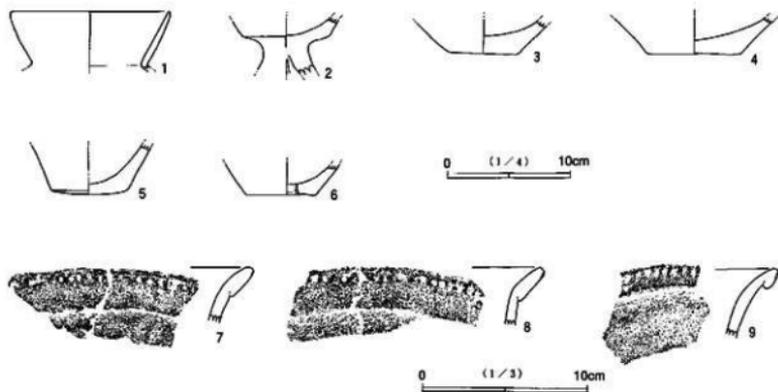
出土遺物は高杯3点が検出された。1は口縁部から杯部の60%と脚部の30%が遺存する。杯部は下端で屈折し直線的に開く。口径17.5cmを測る。2は脚部と杯部のごく一部が遺存する。脚部全体で60%、裾部では30%が遺存する。脚部は直線的に伸び、下端で大きく屈折し裾部に至る。裾部に至る境目に3個の透かし穴を有する。3は杯部下半と脚部の接合部分である。30%ほどの破片である。杯部は湾曲しながら大きく開き屈折した後にさらに開いていく。



第21図 103出土遺物

104 (第19・22図)

103の南側に広がる古墳時代の土器が出土した地点を104として調査したが、遺構としての痕跡は確認されなかった。地山は傾斜に沿って西南方向に若干低くなっていく。古墳時代前期と前期末の土師器、スラグが出土している。1は小形壺の口縁部破片である。口縁部の10%が遺存する。口径13.0cmを測る。2は高杯の体部と脚部の接合部分である。10%が遺存する。体部下端で屈折し直線上に広がっていく。7～9は甕口縁部の破片である。ともに折り返し口縁となり口唇部に刻み目を有する。



第22図 104出土遺物

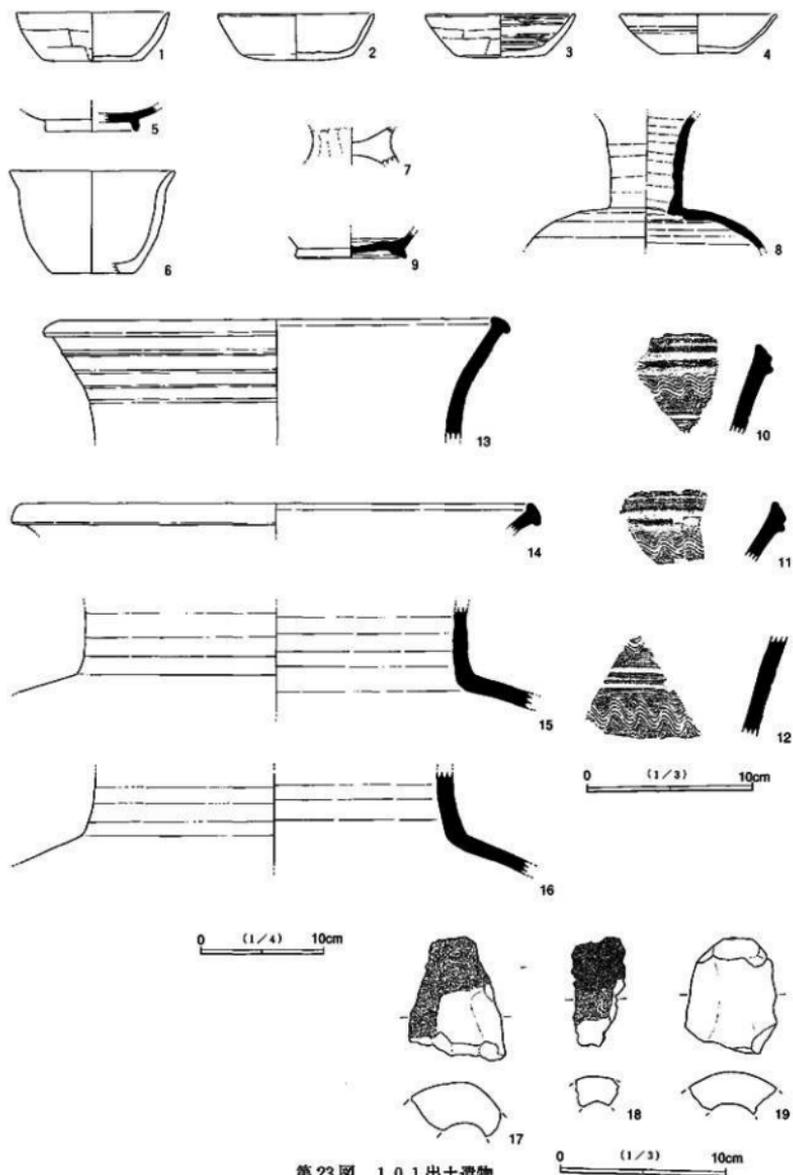
第3節 奈良・平安時代

1 遺物出土地点

101 (第19・23図 図版6・8)

南調査区の北東部の標高8.25mから7.8mの地点に所在する溝状に続く落ち込みであり、奈良・平安時代の土器が出土したことから101として調査した。東部より北西部に進み徐々に低くなり40cmの比高差を測る。また、地山の傾斜は溝の北側が南より40cm高くなり、南西に向かった緩やかな傾斜をなしている。長さは12m、幅は6m程を測り、北西端の上端は掘り込みが緩やかになり、不明瞭な平面形となる。溝の中央部付近のA-A'断面設定場所付近が最も深く、北側上端から1.2mを測り、南側上端からは80cmを測る。西に進むほど緩やかな底部で幅広い楕形の形状となる。底部の標高は西端で7.2m、中央部で7.1m、東端で7.7mを測る。古墳時代前期末の103と重複しており、さらに、やや南に102が重複している。本溝と同一方向の西北に向かっている。本跡は古墳時代の102・103と同様に不定形を呈し、遺構としての性格が捉えられないため、遺物出土地点として報告する。

出土遺物は土師器杯・高杯・小形甕、須恵器高台付き杯・長頸壺・大甕、羽口の破片3個体分などとともに鉄滓が50点近く出土した。1～4は土師器杯である。1は口縁部25%、底部20%が遺存する。内湾気味に立ち上がり、体部外面はヘラへ刷りが施される。口径12.4cm、底径8.0cmを測る。2は口縁部は30%、底部はほぼ全周する。大きな底部から直線状に立ち上がり、器厚は薄い。口径12.7cm、底径9.1cmを測る。3は口縁部25%、底部30%が遺存する。やや小さい底部から緩やかに開き、器厚は厚い。体部外面はヘラ削りが施される。口径12.1cm、底径7.4cmを測る。4は口縁部20%、底部75%が遺存する。小

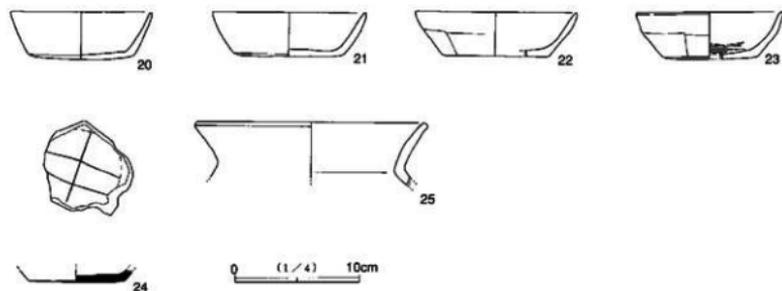


第23图 101出土遺物

さい底部から緩やかに開き、器厚は薄い。口径 12.7cm、底径 6.3cm を測る。5 は須恵器高台付杯であり、高台部を中心に 20% が遺存する。高台部は丸味を持ちシャープさに欠ける。きめ細かい灰色の胎土で焼成も良好である。6 は小形の鉢で口縁部から底部の 10% が遺存する。体部は内湾しながら緩やかに立ち上がり口縁は外反し開く。体部は縦方向のヘラ削り、口縁部はヨコナアが施される。口径 13.4cm、底径 7.0cm を測る。7 は高杯脚部の接合部であり、全周する。太い脚部から浅く開く杯部となろう。8 は須恵器長頸壺の肩部から頸部であり、接合部は全周する。球形になる体部と外反気味に広がる頸部を有する。内面は接合部と肩部に明確な輪積み痕を残し、頸部にはロクロ調整痕を顕著に残す。外面は肩部を中心に淡緑色の自然釉と降灰が付着する。9 は須恵器長頸壺の底部であり、底部の 30% が遺存する。底部端は直線的に仕上げられ、安定が良い。内面はロクロ調整痕が顕著で灰色の胎土で焼成は良い。10～12 は須恵器大甕の口縁部破片である。10・11 は口唇部の直下に櫛指波状文を 12 は 2 条の平行沈線を挟んで 2 段に櫛指波状文が施される。13～16 は大甕の復元実測された破片である。13 は口縁部で 10% が遺存する。口縁部の下に細い突帯と 3 条の沈線が走る。推定口径 38.0cm を測る。14 は口縁部の 10% が遺存する。推定口径 43.0cm を測る。15・16 は肩部から真っ直ぐに立ち上がる形状の大甕とともに接合部の 5% ほどが遺存している。接合部の推定の径は 31cm～32cm を測る。17～19 は羽口の破片である。18 は先端部は溶解し赤変している。

グリッド・トレンチ出土遺物 (第 24 図 図版 8)

101 の南の E22 グリッドと確認調査時の 22T を中心に奈良・平安時代の遺物が出土している。20～24 は土師器杯である。20 は口縁部の 10%、底部の 30% が遺存する。丸底気味の底部からやや鋭く立ち上がる。口径 11.2cm、底径 8.4cm を測る。21 は口縁部の 30%、底部の 45% が遺存する。大きい底部からやや緩やかに立ち上がる。口径 12.4cm、底径 8.8cm を測る。22 は口縁部から底部の 10% が遺存する。直線的な底部からやや内湾しながら浅く開いていく体部である。外面は中位までヘラ削りが施される。口径 12.8cm、底径 8.6cm を測る。23 は口縁部から底部まで 20% が遺存する。22 と同様に体部外面は大きくヘラ削りが施され、それより上部は外反する。口径 11.8cm、底径 7.6cm を測る。24 は須恵器杯の底部である。底部は大部分が遺存する。やや丸味を帯びる底部で内面に「キ」になる線刻が見られる。25 は甕口縁部で全周する。くの字形に真っ直ぐに開き、口唇部は方形に成形される。口径 18.8cm を測る。



第 24 図 グリッド・トレンチ出土遺物

第4節 中近世

1 道路状遺構

014・015・016 (第3図 図版6)

北調査区の中央部を南北方向に走る014・016とそれと直交する015の3条の道路状遺構である。014は南端は調査区内で途切れ、北側は010町田古墳の二重周溝の外縁と平行して続いていき全長50m以上になる。南端は東に弓なりに曲がっていく。幅は南端で1.2m、古墳周溝と重複するあたりで2mを測る狭い道路である。南側の細くなる辺りで30cm幅の浅い側溝が東側のみ掘られる。また、古墳と重複する辺りでは小ピットが多数存在し、014に伴うものであろう。015は長さ25.8mを測り北調査区を東西直線上に横断する。幅は最大7.5mを測り一定しているが、南側に幅50cm～60cmのごく浅い側溝が掘られ、それに対応する側溝が2mの間隔をおいて存在し、最大幅では3.2mになる道路として捉えられる。016は014の4m～5m東に並列し、北端は本調査範囲外に南端は015と交差するところで消滅する。長さ36mで直線上に走る。幅は2.3m～5mを測り中央部で狭くなっている。標高はそれぞれの道路状遺構とも16.4mを測る。

出土遺物は土師器の小破片や陶磁器が出土したが、図化できるものはない。

第3章 まとめ

弥生時代

澁川下流域の後期の集落は西700mの台地上の東天王台遺跡で8軒、その下位面の澁川に面した低台地上の富士見台遺跡で住居跡が検出されており、町田遺跡や東方1kmの沖積地に占地された横峰遺跡など低湿地にも存在する。今回の調査では竪穴住居跡1軒と住居跡に削平された溝2条のみを検出したが、生産地に近接して居住域を構えていたことが伺われた。

古墳時代

町田古墳の墳丘は、土地の利用状況の変化に伴って徐々に削平されていったようで、平成2年9月のほ場整備事業に伴う確認調査時には、僅かに遺存しているのみであった。水田面からは0.6mほどの高まりで、長径6.5m、短径4mの楕円形を呈し、畦畔の隅に残されていた。その後、ほ場整備が実施されると、古墳の周辺は東西に長い水田区画となり、残存する墳丘は水田の中に島状に保存され、周溝は水田下に保存されることとなった。

町田古墳の規模は二重周溝の外縁で90m～84mを測り西辺が短い不整形の形状である。内周溝は西辺は43m、東辺は41m、北辺38m、南辺38.5mを測り、南北方向にやや長い。

二重周溝を持つ方墳として比較検討できる古墳は、富津市飯野の小糸川下流域の沖積地に造営された、内裏塚古墳群中の割見塚古墳¹⁾がある。町田古墳の北約15kmに位置する。規模は墳丘長40m、周溝外縁で107.5mを測り、町田古墳よりも一回り大きい。主体部は凝灰砂岩の切石積みによる複室構造の横穴式石室を有する。町田古墳も残存していた墳丘際の際に灰砂岩が積み重ねられており、割見塚古墳同様に砂岩切石積みの横穴式石室の存在が想定されよう。割見塚古墳の構築時期は出土遺物等から7世紀前半代に比定される。町田古墳は出土遺物はないが、周溝の形状や主体部に同じ石材を使用していることなどから同時代に構築されたと考えられよう。

町田古墳の周溝に削平され、造営直前と想定される溝状遺構は、箱形に鋭く掘り下げられ、また、堆積状況から一時期に人為的に埋め戻されたようである。出土遺物は少なく時期決定は困難であるが、周辺に形状等の類例を求めると君津・富津地域に限定される「小糸川タイプの溝」²⁾の範疇にならう。町田遺跡では、ほ場整備事業に伴う確認調査時に2条、平成14年度と本調査区で6条が検出され、古墳と重複するかその周辺に多く存在し、互いに切り合うものや直交するものもある。また、古墳と平行する溝もあり関連性も考えられる。各溝のレベル差をみるとほぼ同レベルに築かれていることが指摘される。

南調査区の溝状の落ち込みは前期後半の土師器が多数出土するが用途は不明である。竪穴住居跡はカマドが導入される直前の時期で、この落ち込み出土の土器と同時期である。

奈良・平安時代

南調査区の101遺物集地点とその周辺から8世紀後半の土師器杯の破片、須恵器大甕・長頸壺の破片が出土した。また、羽口の破片や鉄滓などが101とその北西の104に出土し、北調査区の010古墳周辺からも若干出土した。鉄滓の総数は62点で総重量は11.88kgを測る。製鉄関連と捉えられる遺構は検出されなかったが、101の続く東側の微高地に鍛冶に関連した施設を設置し、その一部が南調査区の

101に流入したものと思われる。製鉄関連の遺構が調査された下北原遺跡³⁾とは隣接する岩坂浄水場とその先の北東方向に源を発する丹後川を隔てた200mの距離にあり、一連の遺跡であったと思われる。

中近世

北調査区で道路状遺構が東西・南北方向に検出された。浅い側溝を伴うものもある。幅は2.3m～5mほどである。

段差と墳砂

南調査区は東南から北西20cmほどの段差が走り、その西方で更に深く落ち込み黒色土層の泥炭層に至るが、段差の上面と下面に集中して地割れ溝が多数検出された。地震に伴う墳砂の跡であり、墳砂の方向は概ね段差と同方向を向いている。段差により113住居跡の2/3は消滅していることから、弥生時代後期以降に出来た段差である。109・110でも墳砂の跡が溝の堆積土中に存在するので墳砂も弥生時代後期以降である。

古墳時代前期末の106・107住居跡からも地割れ溝を境に床面の高低差が10cmほどあり、地割れに伴う墳砂も断面で確認されている。また、102・103では墳砂の後に土層が堆積したことが確認され、地震の発生時期としては古墳時代前期が考えられようか。

- 注 1) 平成15年3月 小沢 洋 『千葉県の歴史』資料編考古2(弥生・古墳時代)
2) 注1、平成9年3月 甲斐博幸『常代遺跡群』財団法人君津郡市文化財センター
3) 平成4年3月 浜崎雅仁『下北原遺跡』君津郡市文化財センター

第1表 町田遺跡遺構一覧

遺構番号	種 類	時 代	地 点	出 土 遺 物
001	溝	古墳時代後期	11T・26T	
002	欠番			
003	溝	古墳時代後期	11 T	
004	欠番			
005	溝	古墳時代後期	北調査区	
006	土坑	古墳時代後期	北調査区	
007	土坑	古墳時代後期	北調査区	
008	溝	古墳時代後期	北調査区	
009	溝	古墳時代後期	北調査区	ｽﾌﾞ 1
010	古墳	古墳時代後期	北調査区	陶磁器 スﾌﾞ`数片
011	欠番			
012	溝	古墳時代後期	北調査区	
013	欠番			
014	道路	中近世	北調査区	
015	道路	中近世	北調査区	
016	道路	中近世	北調査区	
101	遺物出土地点	奈良・平安時代	南調査区	土師杯4・小形鉢1、須恵器高台付き杯1・ 長頸壺2・大甕4、羽口3・ｽﾌﾞ`多数
102	遺物出土地点	古墳時代前期	南調査区	小形壺1・高杯2
103	遺物出土地点	古墳時代前期	南調査区	高杯3
104	遺物出土地点	古墳時代前期	南調査区	小形壺1・高杯1・甕口縁3
105	欠番			
106	竪穴住居跡	古墳時代前期	南調査区	埴1・高杯3・甕5、紡錘車1、砥石2
107	竪穴住居跡	古墳時代後期	南調査区	106と同C住居跡
108	欠番			
109	溝	弥生時代	南調査区	小形壺1・壺破片
110	溝	弥生時代	南調査区	
111	欠番			
112	遺物出土地点	弥生時代	南調査区	壺破片
113	竪穴住居跡	弥生時代	南調査区	甕口縁、砥石2
114	竪穴住居跡	古墳時代前期	南調査区	甕小破片
115	欠番			

写 真 图 版



遺跡周辺航空写真



北調査区 (北より)

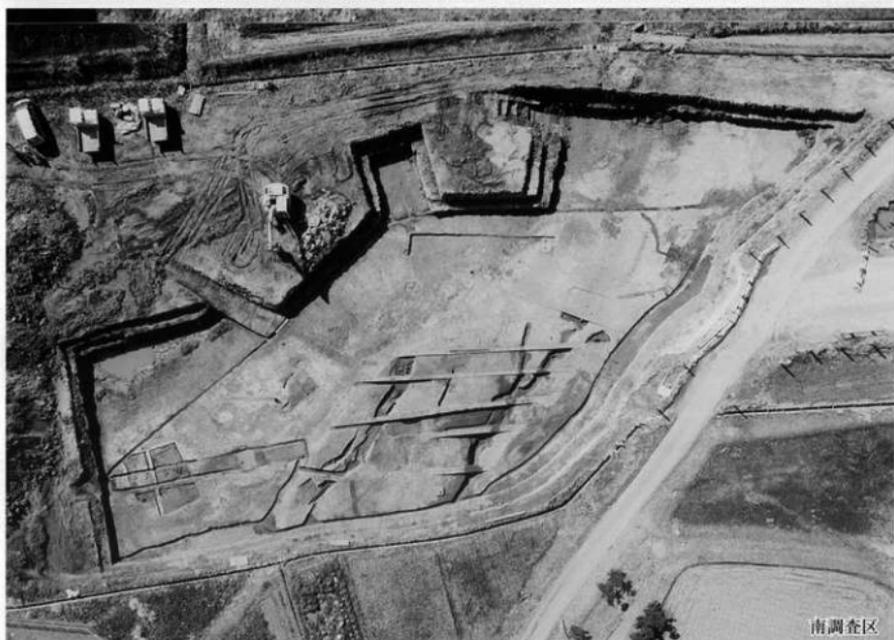


南調査区 (南より)

遺跡遠景 (1)



北调查区



南调查区

道跡遠景 (2)

図版 4



調査前状況・トレンチ調査状況

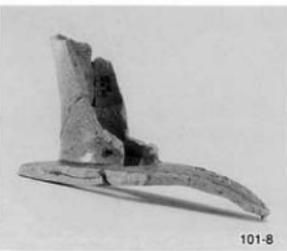


トレンチ調査状況・遺構 (1)





遺構 (3)



報告書抄録

ふりがな	ふつつしまちだいせき							
書名	富津市町田遺跡							
副書名	国道465号線(町田地区)埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	財団法人千葉県教育振興財団調査報告							
シリーズ番号	第615集							
編著者名	高田 博							
編集機関	財団法人千葉県教育振興財団 文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 TEL 043(424)4848							
発行年月日	西暦2009年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
まちだいせき 町田遺跡	ちほりけんふつつしまちだいせき 千葉県富津市岩坂 あがきまらだ 字町田312-2ほか	12226	009	35度 52分 08秒	139度 55分 22秒	1998.12.01 ～ 1999.02.25	20,880㎡	道路建設に伴う 埋蔵文化財調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
富津市町田遺跡	古墳	古墳時代	町田古墳二重周溝 (部分)				沖積地の大型 方墳の周溝部 分の調査。弥 生時代以降の 竪穴住居跡、 溝状遺構など で構成される 集落跡が展開 する。	
	集落跡	弥生時代	竪穴住居跡 溝状遺構	1軒 2条	弥生時代後期土器			
		古墳時代	竪穴住居跡 溝状遺構	2軒 6条	土師器・石製紡錘車・ 砥石			
		奈良・平安時代	遺物出土地点	1か所	土師器・須恵器・灰釉 陶器・羽口・スラグ			
	中近世	道路状遺構	3条					
要約	古墳は沖積地の微高地に占地された一辺90mを測る二重周溝の方墳である。集落は弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡と同時期の溝状遺構などが検出されている。沖積地下部の調査区では地震の痕跡である埴砂が多数検出された。							

千葉県教育振興財団調査報告第615集

富津市町田遺跡

—国道465号線(町田地区)埋蔵文化財調査報告書—

平成21年3月25日発行

編 集	財団法人 千葉県教育振興財団 文化財センター
発 行	千葉県県土整備部 千葉県中央区市場町1-1
	財団法人 千葉県教育振興財団 四街道市鹿渡809番地の2
印 刷	株式会社 富士印刷 千葉県稲毛区轟町3-6-18
